

文化

芝・箸中両村は、大神（おみわ）神社の摂社・檜原神社（以降、檜原社）を氏神として仰ぎ、八月二十八日夕刻の同社例祭は、両村の総代らが参列し、大神神社神職の奉仕で行われている。

桜井市、芝の九日(くにち)  
神社と箸中(はしなが)の国  
津(くにつ)神社には、「元  
伊勢(いせ) 檜原(ひばら)神社(三  
輪)から御子神を迎えた」と  
いう伝承がある。明治維新ま  
で「ガランサンのお渡り」と  
称する興味深い神事があつ  
た。この神事は、『大三輪町  
史』など断片的に記載が残る  
のみであるが、三輪山西麓の  
故事を語る祭礼であったと考  
えられる。

桜井市芝・箸中の  
ガランサンのお渡り行事

笠縫画(やあいかわぬいのむら)」とい伝承される。

その後、大御神は伊勢に御

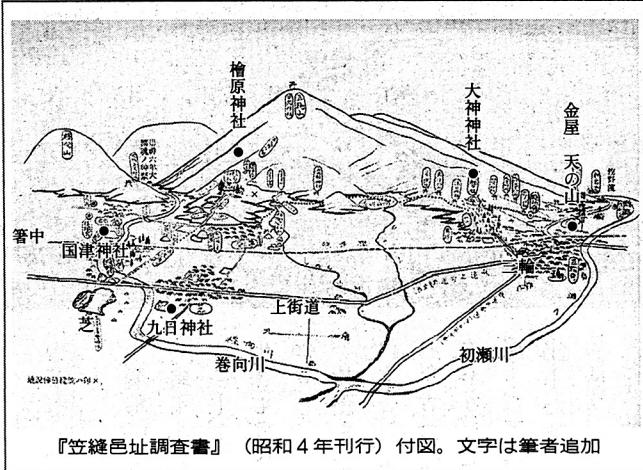
遷幸となつたが、元の鎮座地は檜原社として祀られ、起源は不明だが、大賀茂氏が神主を代々務めていた。大神神社所蔵の室町時代の『三輪山図』には、中央に大神神社社頭と参道が描かれ、その北側の檜原社にも上街道に面しの鳥居があり、参道が延び、

村の銘が刻まれた石燈籠(いのちのう)が残り、両村の信仰を表している。

津神社

津神社

## 三輪山麓の故事伝え



『笠縫邑址調査書』（昭和4年刊行）付図。文字は筆者追加

依麗賣命（さよりびのみのみ）と「市杵嶋姫（いちのしまひめ）」・多岐都毘賣命（たきつゆのみのみ）の四柱を祀る。また、境内には陰陽石の磐座（いわいのわ）も置かれてある。

毎年九月八日が宵宮、九月が祭礼で、以前は金屋の天王五山神社へ渡御があつたが、明治八（一八七五）年に廃して境内で行うことにしたが、明治の末年に廃れた。

九月七日、頭屋（とうや）では渡御のための神衣（がみい）として、表は赤紙、裏は白紙のあわせの衣を作る。これは頭屋が自ら紙を染めて、裁（た）ち縫いをする。

八日は宮作りといつて、座

◎芝の九日神社の祭礼(西)

『大輪町史』(昭和三十四年刊)に九日神社の祭礼の記述がある。

く川左岸（よの）ども集落（しゆらく）にはの手  
れた西池の堤防（ていぼう）の一角に鎮座  
しているが、元はこの西池が  
九日神社の境内地で、（ごくうちじ）神官寺  
「廣護寺」もあつた。祭神は  
天照大神の他、多紀理麗貢命  
(たきりびのみこと)・猪

芝は、元の村名を岩田村（大神社の祝田の意）といふ。織田輔宣（すけよし）が、元文二（一七七三）年に石高（万石）の陣屋を当地に移した際に芝村と改められた。九日神社の社名は、旧暦九月九日の祭礼に因み、地元では「さち」といわれる。

・天津彦根命（あまつひこのわのみこと）・活津彦根命（いづのひこのねのみこと）・熊野櫻樟日命（くまぬくすくすヒノミコト）の三神を祀る。また、近くのホケノ山古墳は、豊鍬入姫命の御陵と伝承される。

仲間入りした男子は頭屋に集まつて膳につく。酒は飲み次第であった。午後四時ころ、渡御が始まる。九日神社境内に着くと、大きく二回まわる。渡御に参加する者は、全部袴（かみしも）を着て小刀をさしたという。この渡御が境内を回つている間は大太鼓を打つ。三回まわると、参拝人一同はわれ勝（が）ちに、前記の弁当箱や神衣を奪い合う。それから参拝人のために御供撤（ごくま）きがあり、続いて頭屋渡しがある。

一束 標元にこの弁当箱をく  
りつけて一荷とする。四体  
の御神体ができると、まず御  
供(ごく)を供えて祭をする。  
(九日)十一時になると、

衆が頭屋の家に集まつて御神体を四枚作る。その方法は、絹木（きようぎ）を三角に折り、頂点を上に笠のようにして、その中へ頭を入れてコヨリで堅く結びつける。青竹や藁（わら）で胴体・手足を作つて、それに白紙を巻く。着物は紙で、普通の袖のある着物のようし、帯は白い紙を巻いておく。全体の大きさは二尺五寸ぐらい。大刀小刀は絹木で作つて置いておく。

また絹木で弁当箱を作り、中にはザクロ・カキ・クリ・サヤマメ・ツキモチの五種を入れ、カシの枝の先の方に稻